



## 狸が恩を返した話

金子彦二郎

### 一

これは桃太郎さんが鬼が島征伐をしたころのお話です。常陸の國なみかたの行方郡なみかたの片田舎の山陰に、人間の棲み家とも思はれないやうなお粗末な草葺家を作つて住つてゐるのは、大したえらい坊さんといふのでありませんが、朝夕一心不乱にお經をあげたり念佛を唱へたりしてゐる年とつた一人の和尚さんでありました。

もうそろ／＼腰も曲りかけたほどのお年にもかゝはらず、この和尚さんは寺男も置かず、自分の手一つで食事などもこしらへ、たゞ明けても暮れてもお念佛を唱へてゐるといふ人の善い方でありましたので、だん／＼と近郷近在の人々も尊び敬つて、時々おいしい食べ物や、小ざつぱりしたお衣などを寄進したり、又ひま／＼には破れた家根の修膳をしてやつたりして面倒を見てくださいるので、和尚さんも大層喜んでゐました。

或る冬の、それはく時計の振りまでが氷りついてしまふ位寒い晩のことでした。どこの誰か、聞き馴れない聲で、入口のところまで、

「和尚さんく。」

と呼びかける者がありました。滅多に人の尋ねて来たことのない此の山寺へ、殊にこの夜更けに、ハテ誰だらう？　と思ひながら、手燭を持って出て見ると、これは又珍しい、年とつた狸のお客様でありました。

大がいの者なら、キャツと言つてびつくり仰天するところですが、前々いふ通り人の善いさうして悟り澄ましてゐる和尚さんのことですから、にこく笑ひながら、

「いや、これは珍しい、誰かと思つたら狸ねこ公か。して又今頃何か急な用でもあつて来たか。」と優しく尋ねてやりました。するともう頭の禿げかゝつたその古狸は、膝を屈め、ベコく頭を二三度さげてお辭儀をして、

「はいく、御承知の通り、私は山や野原に住んでゐますので、雨風や霜雪などには馴れきつてゐる身でございますが、この通り——と言つて禿げた頭をツルリと撫で——年をとりましたら、どうも此の頃の夜寒にはとても我慢がしきれません。どうぞお願ひでございます、夜分だけあなたのお出で

の圍爐裏のそばにおいて下さる。」

と掌をすり／＼頼み込むのです。

和尚さんは相變らずにこ／＼笑ひながら、古狸の申出を聽いて居りましたが、やがて大きく一つうなづいて、

「あゝ、いゝとも／＼、それくらゐな頼みなら、何時でもきいてあげるよ。さあ／＼おはいり。」

と言つてやりました。狸はもう大よろこびで、「それでは御免を蒙ります。」と言つてついで入り、圍爐裏のそばにすわつて、丁度人間がするやうに手のひらを翳したり、月のよい晩に鼓代りに打つた大きなお腹をつき出して温めたりしてゐました。和尚さんは、例の如くお經を上げたり、お念佛を唱へたりしてゐましたが、四時間ばかり経つて、夜もほの／＼と明け初める頃になると、

「和尚さん、お蔭で助かりました。誠にどうも有りがたうございました。又寄せて戴きます。」  
とお禮を言つて外へ出て行きました。

## 三

それからと言ふものは、狸公は毎晩のやうにやつて來ます。ある時なんかは、年とつた和尚さんの拾ひ集めた薪を焚かせるのがお氣の毒だといつて、自分も枯枝や乾いた落葉なんかを拾ひ集めて抱きかへて來たりしました。

人の善い和尚さんは又、かうして毎晩々々狸がやつて来るうちにすつかりお馴染になつてしまつて、日が暮れると、「もうそろ／＼狸公の来る時分だが、今夜はどうしたか、少々來やうが遅いやうだぞ。」といふ風に、狸の來るのを待ち受けてゐるやうになりました。

こんな有様で寒い／＼冬も過ぎて、春三月にもなり、小さな子供たちがお手々をつないで

春が 來た

春が 來た

どこに 來た。

山に 來た

里に 來た

野にも 來た。

といふ唱歌をうたふ頃になると、ふつ／＼狸の姿は見えなくなりました。

#### 四

いつも來る珍客の足がふつ／＼りと杜絶えましたので、和尚さんは、何となく物足りない心持ちでゐましたが、やがて暑い／＼夏が來、涼しい風の吹く秋も過ぎる頃には忘れるともなく狸公のことは忘れてゐました。

丁度去年狸公がやつて来た時から一年ばかり経つて、再び霜に雪に夜寒をかこつ冬が来たたら、又例の狸公が毎晩のやうにやつて来ました。

かういふことが十度も繰返された或る年の或夜のことです。狸はごく神妙に和尚さんの前に手をついてお辭儀をしてから、こんなことを申しました。

「和尚さんのお情で、毎年々々あの凍え死ぬやうな寒さから救つて頂いて、かうして無事息災で長生きさせて頂いて、こんなに嬉しいことはありません。つきましては私の出来ます事で、何か一つ御恩返しを致したいと思ひます。どうぞ何か和尚さんに御望みのことでもございましたら、遠慮なく仰しやつて下さい。」

和尚さんは、例の如くにこゝして聽いて居られたが、

「御親切は有りがたいが、わしのやうな出家には、何といつて『これが欲しい』とか『かうなりたい』とかいふ望みなんか一つだつて半分、だつてありやしないよ。まあ、そんな心配や氣兼ねんかせずに、このわしが生きてゐるうちは、毎年冬になつたらやつてくるがいよ。」と言つて笑つて居りました。

狸はこの慾のない和尚さんの心持にますます感心してゐましたが、併し、たゞ恩を受けてばかりゐては相濟まぬとも思つてゐるんでせう、うるさく「何かお望みをいつて下さい。」とせがみますので、和

尙さんもいぢらしくなつて、或時こんなことを言ひました。

「いや、ほんとにわしのやうな慾も得もない年寄りの出家には、何一つ望つていつてないが、どうしても何か一つ言へと言ふなら言つて見てもいいが、——それはね、小判が三枚もあつたれよからうなア——と思つてゐることだよ。朝夕の身すぐしにも不自由はしないし、この儘往生しても、村の衆が葬式だけは營んでくれるであらうから、お金なんが一文だつて入用ではないが、もしも小判の三枚も手に入つたならば、有名なお寺へ寄進して、立派な御法事を營んで、間違なく極樂往生の出来るやうにしておきたいと思つてゐる。が——これも無理算段までして手に入れたいと思はない。萬が一、手に入ることでもあつたら……と、あんまり、お前が親切に言つてくれるから、まあ一寸言つて見たまてさ。ハツハツ……。」

すると、狸は何かしら打ちうなづいてゐたが、やがて又小首を傾けてとくと思案でもしてゐる様子。和尚さん、「こりや厄介なことを言ひ出して、狸を苦しめることになつたわい。」と見て取つたので、もう一度念を押して

「これ／＼、今の小判の話ね、あんな物が欲しいなどいふことは、出家の身の言ふべきことではないのだ。わしもどうしても手に入れないなどは思つてはゐないのだから、決してその爲に苦勞したりしてはならぬぞ。」

と言ひきかせました。

狸はすなほに合點々々して、和尚さんの氣持がよくのみこめたやうな舉動をしてゐましたが、不思議なことには、それからといふものは、ふつゝりと來なくなつてしまひました。

和尚さんは大層不思議に思つて、「ハテ、どうして狸公は來ないのだらう。あれほどに言つてゐながら三枚の小判がそろはないので、きまりが悪くて來られないのか。それとも小判を盗み出しに行つて、見つかつて打殺されたのだらうか。何にしても、ひよんな事を言ひ出して、罪なことをしてしまつた。南無阿彌陀佛々々々々」と後悔しても、今更どうにもならない。殺されたものなら、せめてその魂が極樂往生の出來るやうに祈つてやらうと、狸の爲に又一層お經を熱心に上げてやつたりしてゐるうちに三年といふ月日が經つてしまひました。

## 五

ある夜のこと、門口で

「和尚さん〜」

と呼ぶ聲がする。ハテナ「狸にそつくりな聲だな」と思ひながら、すぐさま立出て戸を開けると、例の狸公でありました。

「やあ、狸公か、よくまあ無事であるてくれたね。それはさうと一體全體この長い月日をどこでうろつ

いてゐたか。」

と訊ねられると、狸は、神妙な態度で内に入り、

「實は、いつぞやお話の小判の三枚のことですが、他の用にお立てになるのなら、何十枚何百枚も、すぐ手に入れて来て差上げることが出来ますが、何しろ極樂往生のかなふやうにお寺へ御寄進なさらうといふ爲の小判と承つて見ると、まさか餘所の土藏あたりから盗み取つたりして、盗まれた人の怨でもかゝつてゐたのでは、極樂往生の爲のお役には相成らんと思ひまして、あれから佐渡が島へ渡り土や砂に交つてゐる小粒金や、人が選り残して捨てたものなどを拾ひ集め、新奇に作つて參りましたので、こんなに日數がかゝつたのです。さういふわけで此のお金は決して汚はしいものではありませんから、安心して快くお納め下さい。」

かういつて三枚の小判を和尚さんの前に出しました。

見れば成程作つたばかりの新しい小判なので、和尚さんは押戴いて受取り、

「いやどうも、つまらないことを言ひ出して、お前にも飛んだ御苦勞をかけました。しかしながらお蔭でわしの長い間の望も叶つて、こんな嬉しいことはない。ありがたい〜。」

と言つてお禮を述べました。

狸も大層よろこんで、「これで私の志もどうやら届きました、こんな嬉しいことはございません。だが



この事はどうぞ世間へは話しなさらぬやうに願ひます。」と申しました。

が、和尚さんはかう言ひました。

「いや、折角お前の申出だが、これだけは内密にはして置けないよ。だつて考へてごらんよ、こんな大金をこんな見すばらしい山寺に置いたら、早速山賊などに奪ひ取られてしまふだらう。だから人に預けるか、取りあへずお寺へ寄進しなければならん。ところで、さうなるとわしのやうな貧乏な者には誠に不相應な大金のこととして、すぐさま人様から盗んで來たのでないかなど、疑はれるに違ひない。だからこの大金の出來た一伍一什は、正直に言はずにはおけないよ。たゞ併しお前が迷惑なら世間へは、『狸公は、それ以來どこへどうしたか、わしの所へはもう二度と姿を見せない。』とかう吹聴しておいたら、不都合もなからうぢやないか。さういふことにしておいて、お前はやはりこれまでのやうに寒くなつたらあたり來るがいよ。」

狸もこの道理のある言葉に納得して、それから、この和尚さんの生きてゐられるうちは、毎年冬になるといつも此の山寺へあたり來たといふことであります。